

「春日左抛御前法楽独吟百韻」訳注（一）付翻刻

伊藤伸江・奥田 勲

宗祇は、七十八歳となった明応七年十二月頃に、自撰発句集『宇良葉』を編んだと考えられている。彼にとり最後の自撰句集となった『宇良葉』は、それ以前の自撰句集『萱草』、『老葉』、『下草』と違い、発句のみの集であり、末尾には、成立年代もそれぞれ違う三種類の独吟百韻が置かれている。すなわち、実はこの集は、全く他者の句を持たない¹⁾。宗祇が、自分の句のみで構成する意図でつくった、初めての、そして特別な形態の集であった。

連歌という文芸の中にあつて、発句と独吟百韻という形態で、いずれも作者は宗祇ただ一人、宗祇個人が生み出した文学作品である。その中から秀句、優品を選抜して入れるということは、発句の部では、一座の張行において百韻の顔となる句を範として示すことであり、独吟百韻三種の方では、百韻の流れをすべて自身で差配するところのような百韻の流れとなるという、その理想の形を示すことになる。そして、『宇良葉』の発句群にはかなり多くの詞書が付されて、その結果宗祇の動静が語られている。また、三種の独吟百韻には、宗祇自身が成立事情を詳しく述べている。ここからも、この句集の形式が宗祇の意識的な選択であることがはっきりとわかるのである。

さらに、百韻について見れば、宗祇は、「我程独吟多したる者はなけれ共……」（『実隆公記』文明十八年九月十六日条）と自ら独吟をいかに多く詠んだかにふれている。その数多い中から選択された三つの百韻は、彼の人生の記念すべき事跡を示すと同時に、その時に際していかに自らの文学を創ったか、を示すであろう。こうしたことを思えば、『宇良葉』の形態の特異性は、宗祇の自伝の一助となるのみならず、宗祇の句作の真髄にせまりうる形態なのである。

『宇良葉』末尾の三百韻のうち最初の百韻である、この「春日左抛御前法楽独吟百韻」は、宗祇が五十六歳であった文明八年に、室町幕府將軍家の連歌会に初めて参加するにあたり、春日の末社左抛社に祈念するところあって詠んだ百韻であった。百韻の発句「朝なけにさしそふ春のひかりかな」は、発句の部にも「將軍家の御会にまいるへきよし侍しとき、春日左抛明神に立願したてまつるとて」と詞書に書かれて入れられている。伊藤と奥田は、この百韻の宗祇の人生における重要性を鑑み、『宇良葉』入集の意味や宗祇の百韻の創作手法を説明すべく、「春日左抛御前法楽独吟百韻」の訳注を試みることにした。

注(1) 発句の部に一句他人の句があり、また「夢想之連歌」と題される独吟百韻の発句も夢人の句である。金子金治郎「宗祇の謎―『宇良葉』三百韻を読む―」(『国語と国文学』第七十三卷九号・平成八年九月)に既に指摘されている。

櫻井本『宇良葉』内「春日左抛御前法楽独吟百韻」翻刻

『宇良葉』は、櫻井健太郎氏所蔵本(櫻井本)以外に伝本を聞かない孤本である。本書はまだ未調査であるが、国文学研究資料館の紙焼き写真によれば、箱に収められており、外箱蓋に直書で、「宇良葉 一冊 宗祇筆」と書かれ、「百四十七番 宇良葉 宗祇筆」(「百九十二番 五十八号」と記された貼紙が貼られている)と書かれた添付の書を持ち、内箱には表に「宇良葉 一冊 付札三枚」との貼紙と、「櫻井蔵」の朱印があり、裏には三枚の極札が貼られている。それぞれ「宗祇名判 同付紙二枚/所々ノ加筆 真跡/同外題 宇良葉一冊者/同宿/宗哲筆 印影(单郭隅入朱方印)」、「種玉庵宗祇/同門弟宗哲 両筆 宇良葉一冊/奥宗祇名判有之 「箕/山」(单郭朱方印)」、「宇良葉 内押紙二ヶ所者連哥師宗長/奥判形者宗祇真蹟 「琴/山」(单郭朱方印)」である。櫻井本表紙左上には、「宇良葉」の題簽があり、本文には跋文、奥書はない。ただ、句集末尾六十二丁裏左下に「宗祇」の署名と花押があり、極札はこれを真蹟とする。『宗

『祇句集』の「宇良葉（櫻井本）」解説（湯之上早苗・金子金治郎氏）は、「最後の宗祇の署名と花押は宗祇自筆と認められているが、あるいは、花押だけは宗祇自筆かも知れない」とする。自筆ならば、宗祇存命の内に書写された貴重な本となる。

以下、櫻井本『宇良葉』に収録された「春日左抛御前法楽独吟百韻」の翻刻を、国文学研究資料館紙焼き写真により掲げる。なお、『宇良葉』の本文全体の翻刻としては、深井一郎氏による「宗祇連歌発句集 宇良葉」（金沢大学教育学部紀要）第八号・昭和三五）、湯之上早苗氏による貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）があり、また江藤保定氏『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）の資料編には、独立に流布している「文明八年四月十五日何路独吟百韻」（底本 静嘉堂文库本）の翻刻が存するが、訳注にあたり、翻刻をあらためてなすものである。

【翻刻】

春日左抛御前法楽

何路

- 1 朝なげにさしそふ春のひかりかな
- 2 むめうちかほり雪とくるころ
- 3 やまもとの川そひ柳風吹て
- 4 むかひのむらに舟わたる見ゆ
- 5 人さはくかりねの月や明ぬらん
- 6 道ゆきふりにはらふしら露
- 7 かたはらにこ萩しほるゝ野へにきて

- 8 むしのごゑきく日はくれにけり
9 山かけや風もとまらぬ草の戸に
10 つもらむほとそ雪に見えたき^ヒる
11 年はまた若木のまつのかたふきて
12 わかよはひこそおもひしらるれ
13 末とをくむかし契りし人もなし
14 あたなるものを何たのみけん
15 なるゝまは風まつ雲のわかれ路に
16 月もたひなるあかつきの山
17 天つ鴈よるのたかねにごゑわひて
18 時雨にうつるあきのさむけさ
19 露さへやわかすむ里をあらすらん
20 おもひなをきそうき世なりけり
21 ちらすとも見はてん花はなき物を
22 いさきくらくとやかせはふく覽
23 なく鳥のこゝろもしらす春くれて
24 かすみを野へにわくるかり人
25 なす罪^ヒをみちにはなとかまよふらん
26 とをしと後の世をなおもひそ
27 行末の老をはまたしわかいのち

「四十八丁表

「四十八丁裏

- 28 かへさやすらへかたるふるさと
たのむ夜にまた深はてぬ月をみて
とふやときけは秋かせそふく
はなすゝき君かうへしを忍ふらん
31 おのへのみやのあとのかなしき
32 山ふかき雪を鹿のみふみ分て
33 ゆふへの雲のをちのたひ人
34 みやここそかへるを見ても恋しけれ
35 つらき三とせををくるしま国
36 あまの子のおやの別もいか許
37 あはれにけふるしほかまの浦
38 水さむき川原に秋の日は暮て
39 ひさきうちちるかた山のかけ
40 霧のほる木末に風やわたるらん
41 野中のさとは月もすさまし
42 狐なくあたりに草の枕して
43 たゝつかのまの夢をたに見す
44 たかをくるこの一筆そおほつかな
45 とはしとこそはわれもいひつれ
46 花になと去年の嵐を忘るらん
47

一四十九丁表

一四十九丁裏

- 48 はるのわか葉もたゝ秋の山
49 露かすむ柴のいほりの夕暮に
50 月にやこけの袖もしほらん
51 すてし身は後のなをなかきや夜ヒヒにね覚して
52 きりにも後のやみそかなしき
53 こひしなは思ひもつきねむねの中
54 人のつれなき世をもうらみし
55 数ならてなさけをみむもいかならん
56 みやこのつてにかゝるやまさ
57 たつねよと花にやまかふみねの雲
58 ほのくかすむあけかたの空
59 さえし夜の月に春風又ふきて
60 ふねをいたせは雪そはるけき
61 ふしなれし竹のとまりの朝またき
62 羽をならへつる鳥もいにけり
63 契てや常ならぬみちをわするらん
64 神なる雨にかよふゆふくれ
65 よそ目にはおもふ中とやいはれまし
66 ひとりくねぬる夜のとこ
67 ゆきつれし人はいづくのかり枕

一 五十丁裏

一 五十丁裏

- 68 とは、や月にこゆるおく山
69 秋ことの其あらましは道もなし
70 はなを心にわくるみや木野
71 しけりあふ木のした露に立ぬれて
72 むすひもあかぬみつのすゝしき
73 住なれて身もしつかなるみねの寺
74 夜ふかきかねそなみたもよほす
75 なく鳥を空音になせはこゑそひて
76 とゝめかたきはわかれゆく人
77 かきりある道ならはなとむまるらん
78 水もかへらす火もきえにけり
79 かきためしもくつをなみの又ひきて
80 きよきなぎさにのこる松かせ
81 月しろき雲るをたつやしたふらん
82 枕のうへはたゝあきの霜
83 しく袖の露もたまらす野は枯て
84 あさゆくみちはぎゝそよくをと
85 とふもうし此一ふしに名やたゝん
86 なれすは何を身に思はまし
87 面影もよしきは今はとまるなよ

「五十一丁表

「五十一丁裏

- 88 かゝみにとしそうつりもてゆく
89 山鳥のおろのはつ雪ふりそひて
90 へたつるみねもしるきうぎ雲
91 三笠なる宮居にひとし鹿嶋かた
92 神やあまたにかけむかふらん
93 ねかふてふ心は人にさたまらて
94 身そいにしへにあらすなり行
95 老木さへはなはおもひやなかるらん
96 おほうちやまの風のゝとけさ
97 しら雲に春のふもとの夜は明て
98 舟こく海に月おつるかけ
99 わすれめやこのすみの江の秋の暮
100 なを手向をけ露のことの葉

「五十二丁表

「五十二丁裏

此百韻は將軍家の御会にはしめて
めしくはへられ侍し時春秋／五十六歳春日の
末社左抛の御前に祈念の事
ありて彼御社の名を発句の中に
かくして手向侍しを程へて後
独吟の功を三時に終侍しもおほよそ

この神にいのり申す事いさゝかその

よしある事になん

「五十三丁表

※丁数に関しては、「墨付は第二丁表から」（『宗祇句集』解説）として数えた。

「春日左抛御前法楽独吟百韻」 訳注（一）

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の「春日左抛御前法楽独吟百韻」である。対校本に、①北海学園北駕文庫本（1612811612、D613、写一冊、100002643）、②北海学園北駕文庫本（161341418、D601、写一冊、100002671）、③大阪天満宮文庫本（3591114114、写一冊、100201215）、④京大平松文庫春日未社左「ナゲ」法楽（マイクロフィルム番号MNO: P515）、⑤東大国文研究室蔵『連歌名句』（中世12, 7-9）を使用し、校異を示した。

①～③、⑤は国文学研究資料館の紙焼き写真、④は京大図書館のHPを参照した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は既に翻刻の形で示しており、適宜参照されたい。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考慮して漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じて平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

一、各句には、【式目】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には、【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

(初折・表・一)

一 朝なげにさしそふ春のひかりかな

【式目】 春(春)

賦物「朝路」(野坂本賦物集) 「何路ミチ或チ … 朝」(連歌初学抄)

【語釈】 ○朝なげに… 朝に昼に。「朝に日に」が転じたものとされる。「あさなげ、あさにけ、あさにけ、同事也… 萬葉集には、おほくあさにけとよめる、おなじ心也。」(『僻案抄』)。「朝に日に」は、万葉集に例が見られる。「青山の嶺の白雲朝に日に常に見れどもめづらし我が君」(万葉集・卷三・湯原王の宴席の歌二首・377)。「万葉詞」にも同歌を引き「アサニケニ」と見え、『宗祇抄』にも「あを山の峯のしら雲朝にけにつねにみれともめづらしき我君」とある。古今集では「あさなげに見べききみとしたのまねば思ひたちぬる草枕なり」(古今集・離別・ひたちへまかりける時に、ふぢはらのきみとしよみてつかはしける・寵・376)がある。この歌は、「きみとし」に、歌を贈った相手の名「公利」が、「思ひたちぬる」に、「常陸」が詠みこまれている物名歌。なお、冷泉家時雨亭文庫蔵嘉禄二年本は、この歌に「あさなげに」と声点をつけている。

平安期の例歌としては、「あさなけに身にやはそふとふりすててゆけどわかれぬ人のおもかげ」(定家名号七十首・旅・38)、「あさなけに世のうきことをしのびつつながめせしまに年はへにけり」(後撰集・雑二・土左・1174)等。また、本百韻よりも少し後、近衛家出身の実相院門跡増運の、「あさなけにわが恋ひをればつれなごのつらきものからおも影にみゆ」(歌合文明十六年十二月・前大僧正増運・148)がある。この歌合は、足利義尚が万葉風体の和歌を公家・武士らに詠ませそれを百番につがえたものであり、ここから本句の「あさなけに」は宗祇の万葉知識の発露としてとらえられよう。また、こうした歌例に比べ、本句は、下句に、より自由につながり、さらに「朝なけ」のうちに「さなげ」(左抛)を隠すなど、独自の工夫を加えている。こうした技巧の和歌としては、後代(承応三年(一六五四)推定)の例ではあるが、飛鳥井雅章の「さなぎだに佐抛の神の御影やまうつろふ花に風もこそふけ」(吉野雲・「佐抛明神の山を御影山と名づけ侍りしは天人のみかげのうつりしよりのこと、語侍りしかば」・11)がある。なお、これは吉野の左抛明神を詠んだ歌である。

本句以外に、「あさなけに」を詠む連歌の句例は、管見の限りでは「あさなけにおくつゆたかきさなへかな」(染田天神連歌・永正十三年五月九日詠第三百韻・発句)のみだが、こちらは後代の句であり、また天神法楽であることから、「さなげ」を入れた隠名の句とは断定できない。その点で、宗祇独自の発想が目立ち、注目されるものである。○さしそふ…さらに加える、添える。「ゆふつゆにひかりさしそふつきいでて」(染田天神連歌・文明五年七月五日詠第一百韻・第三)。○春のひかり…「春日」を暗示する表現。「もえ出し真葛の末葉青やかに／春のひかりのしるき春日野」(寛正二年九月二十三日何人独吟百韻「岩か根に」・95／96・宗祇)。

【現代語訳】朝にまた昼に、一段と加わっていく春の日ざしは、佐抛明神のお力にさらに加わる春日明神のご威光を示している。

【他出文献】『自然齋発句』500 (これは詞書に「左抛社法楽の独吟に」とする)、『大発句帳』2420

(初折・表・二) 朝なけにさしそふ春のひかりかな

二 梅うちかほり雪とくるころ

【式目】春(梅) 梅只一 紅葉一 紅梅一 冬梅一 青梅一 (一座五句物) 雪三用之、此外春雪一 似物の雪別段の事也 (一座四句物)

【語釈】○梅うちかほり…梅がほんのりと香って。「うち」は種々の意味を添える接頭辞だが、「うちかおる」は、さつと匂う、ほんのり匂うと解されることが多い。「春なりな月のほのかにかすむ夜にのきばの梅はうちかほりつつ」(伏見院御集・春哥の中に・2224)。「さく梅の花の木かげに立よれば手折ぬ袖もうちかほりつつ」(言国詠草・明応二年正月廿二日親王御方月次御会始・梅・690)。「残りてもあはれはまさる春の花／梅うちかほる有明のそら」(表佐千句第五百韻・87／88・紹永／宗祇)。表佐千句は、本百韻と同じ文明八年の三月に張行されている。「あはれ」な景に付けた句であるところから、宗祇の発想の参考になろう。○雪とくるころ…雪が解ける頃。「雪解るさ山がすそに水落て／ころもやしほる小田返す人」(顕証院会千句第九百韻・71／72・忍誓／来阿)。

【付合】佐抛明神に加えて春日明神の神威を詠む重い発句に、梅の花の香りと雪解けの季節感で軽く応じた。

【一句立】梅の花の香りと雪解けによって春の到来を穏やかに表現している。脇句であり、当季の情景と同時に、梅の香の趣を情景に加えていく。

【現代語訳】春の日の光が、日に日に加わってくる。梅の花がほんのりと香って、雪が解ける頃になった。

【他出文献】老葉(吉川本)・春・23、老葉(毛利本)・春・35、老葉(宗訊筆本)・春・33、愚句老葉44

「春日左抛御前法楽独吟百韻」は、文明十三年に『初編老葉』(吉川本など)、文明十七年から『再編老葉』(毛利家本、宗訊筆本など)を編むにさいして、編集資料として用いられ、多くの句が採録された。脇と第三の付合も、春連歌の巻に入る。

（初折・表・三） 梅うちかほり雪とくるころ

三 山本の川沿ひ柳風吹きて

【式目】 春（川沿ひ柳） 柳只一 青柳一 秋冬の間一（二座三句物）

【語釈】 ○山本の…山のみもとの。前句の情景と合わせれば、山のみもとの川では、雪解け水により、増水し、流れも激しいことになる。○川沿ひ柳…川に沿って生えている柳。『俊頼髓脳』をはじめ、『奥義抄』、『袖中抄』などは「稲筵」の例歌として、「川沿ひ柳」の語句を持つ後述の顕宗天皇歌を出している。宗祇にも類歌があることから、歌論により顕宗天皇歌を学んだ知識によって使用したのであろう。「いなむしろ」には諸説あるが、例えば『袖中抄』は、「川の底に藻といふ草のみまなく生ひたるは、稲を筵に敷きたるに似たれば、古くより水下の草をもいなむしろといふといへり」という。宗祇の後述例歌においては、「川沿ひ柳」は、川岸の柳の枝が川水にひたり、ゆれ流れていることを「いなむしろ」に似ていると形容しているのであろう。この句においてもしかりか。「いなむしろ川ぞひ柳水ゆけばなびきおきふしその根はうせず」（日本書紀・83・顕宗天皇。「いなむしろおきふししげく山本の川ぞひ柳はるかぜぞふく」（宗祇集・河辺柳・13）。○風ふきて…（柳の枝に、春の）風が吹いて。「向ひの山も遠き五月雨／我門の春の柳に風吹て」（竹林抄・春・39・智蘊。「いもが門柳のいとに風ふきて／みだれ心の花のしたぶし」（享徳千句第九百韻・93／94・忍誓／宗砌）。

【付合】 梅の花と雪解けによって春の到来を示す前句に、視野を広げ山を遠望し、麓に目を移すと川が流れ、その土手に植えられている柳の葉に春風が吹いて枝を揺らしていると付けた。

【一句立】 山があり、その麓に川が流れる風景を大きくとらえ、近景の川の土手の柳に視線を移し、さらに細かく柳の葉が風をうけてそよぐ様を描いている、動きの感じられる一句である。

【現代語訳】 梅が香り、雪が解ける頃になって、山のみもとの川べりに生えている柳に、春風が吹き、枝が揺れている。

【他出文献】老葉（吉川本）・春・24、老葉（毛利本）・春・36、老葉（宗訊筆本）・春・34、愚句老葉45

【考察】発句から第三までの流れと用字は、後の「水無瀬三吟百韻」（長享二年（一四八八）の発句から第三「雪ながら山本かすむ夕べかな（宗祇）／行く水遠く梅にほふ里（肖柏）／川風に一むら柳春みえて（宗長）」に類似する。

また、『愚句老葉』には次のように宗祇自注（自）、宗長注（長）が付される。

四四 梅うちかほり雪とくる比

四五 山本の川そひ柳風吹て

自 是は、あるときの第三に申侍し、其句躰と聞え侍るやらん、第三にはいさゝか志有とぞ

長 河辺の梅柳なるべし

穎原文庫本『老葉注』（注者不詳）では「此句尤あらハ也、眼前なり」と注されている。あきらかな景気の句であるが、第三に置くことに關して、宗祇には思うところあつた自信作であつたようである。

（初折・表・四） 山本の川治ひ柳風吹きて

四 むかひの村に舟わたる見ゆ

【式目】旅（舟わたる）舟（水辺・用（新式）、水辺体用之外（新式今案））

【語釈】○むかひの村：対岸の村。向こう岸の村。「竹よりおくの人の音なひ／行舟にむかひの村を近くみて」（美濃千句第二百韻・6／7・宗祇／紹永）。○舟わたる：舟が横切り渡つていく。「小塩山ふもとのきりのたえまよりよどの河

瀬のふねわたるみゆ」（夫木抄・小塩山・⁸²⁴³藤原光俊）（夫木抄には、よど川・1106にも重出）。「千里のうへに鐘遠

き山／舟わたる春の夕波音消えて」（萱草（伊地知本）・春・118／119）。

【付合】 山のふもとをめぐって流れる川に沿って並んでいる柳の枝を風が揺らすという近景から、遠くを見やると、対岸の村に向けて舟が川を横切って行くという大きな風景に転換して変化を与えている。

【二句立】 対岸に遠望できる村があり、その村を指して舟が漕ぎ渡って行くのが見える、という句意である。また、彼岸・此岸の含意あるか。

【現代語訳】 山のふもととの川べりの柳には風が吹いて葉が揺れている。そのようなとき、対岸の村に向かって舟がわたっていくのが見える。

【他出文献】 老葉（吉川本）・旅連歌・1167、老葉（毛利本）・旅連歌・681、老葉（宗訊筆本）・旅連歌・717、愚句老葉814
四、五句の付合は、『初編老葉』、『再編老葉』の旅連歌に入る。

（初折・表・五） むかひの村に舟わたる見ゆ

五 人さわぐ仮寝の月や明けぬらん

【校異】 「明」①更^明

【式目】 秋（月）・旅（仮寝）人（人倫）月（可隔三句物）月与月（七句可隔物）

【語釈】 ○人さわぐ…「さわぐ」は、うるさく声を立てるとというのが一般的な意味だが、以下の例のように、旅人が早朝旅立つために早くから声や音をたてはじめるという文脈で用いられることが多く、ここではそのような限定はないが、その意味を含んでいると考えられる。「稲葉もる刈穂の床に目もあはで／やどりやいづる人さわぐなり」（文明十四年二月五日何路百韻（湯山両吟）・7／8・宗伊／宗祇）。湯山両吟宗祇自注本は、第八句（「やどりやいづる人さわぐなり」）に「いなばもる声にめもあはぬ旅人宿出る心にて候哉」と注する。○仮寝の月…旅先の仮の宿で見える月。早く旅立つため、ゆっくりと夜を過ぎすこともないままに夜が明けた気分を表現している。「古郷にかりねの月の都人みて

だにつげよこふるね覚を」(草根集・旅宿・8804・康正元年三月二日条)。○明けぬらん：①本のみ「更ぬらん」としているが、「明けぬらん」の方が、「人さわぐ」とあわせ意味が通る。「ゆふつけ鳥ぞいねがてになく／月しろき夜やいつはりに明ぬらん」(吾妻邊云捨・427/428)。空が白んで月が見えなくなっていく、夜が明ける様子を、「月や明けぬらん」とつなぐ分、圧縮した表現である。

【付合】向こう岸へ向かう渡し船のさまを詠んだ前句に、こちらの旅宿では旅立つ人々が夜明けからざわめいているとつけた。旅人たちは、その舟が向こう岸から戻ってくるのを待っている風情であろう。

【二句立】【語釈】で述べたように、「さわぐ」と「仮寝」と「明けぬらん」によって、早朝の旅宿の様子が描かれている。

【現代語訳】川向こうの村に舟が渡っていくのが見える。早朝出立するために旅人が声や物音を立てている。旅宿で見える月も消え、夜が明けたのであろう。

【他出文献】老葉(吉川本)・旅連歌・1168(「明ぬらん」)、老葉(毛利本)・旅連歌・682(「明ぬらむ」)、老葉(宗訊筆本)・旅連歌・718(「明ぬらん」)、愚句老葉815

【補説】『愚句老葉』には次のように宗祇自注(自)、宗長注(長)が付される。

八一四 むかひの村に舟わたるみゆ

八一五 人さはぐかりねの月や明ぬらん

自 旅の暁の景気也

長 此二句、又見えたるばかりにや、旅のあかつきの眺望景気なるべし

(初折・表・六) 人さわぐ仮寝の月や明けぬらん

六 道行きぶりに払ふ白露

【式目】 秋（白露） 白露（降物） 露：如此降物（可隔三句物）

【語釈】 ○道行きぶりに：行きずりに。元来は春歌に多く用いられる言葉であり、次第に秋歌にも使われるようになる。「夕やみの道行きぶりの梅が香にたが名はたたじ手折りてやみん」（宗祇集・行路梅・4）。「帰鴈トアラバ、道行ぶり」（連珠合璧集）。「春来れば雁帰るなり白雲の道ゆきぶりにことやつてまし」（古今集・春上・30・凡河内躬恒）。「都よりたよりもまれの秋の空／道行ぶりの花の山ごえ／梅が香に遠かた人の宿とひて」（文明四年十月二十六日何路百韻「風や雲」・27／28／29・言（聖護院道興）／専順／宗祇）。宗祇は恋の情景として使うこともあるが、万葉歌「玉梓の道行きぶりに思はぬに妹を相見て恋ふるころかも」（万葉集・2605・作者未詳、玉葉集¹²⁹⁷に入る）による。「つらねし袖のかこそわすれね／心しむ道ゆきぶりのおもかげに」（萱草・恋連歌・785／786）。「かりねのやどりいかがあかさ／とふ夜とて道行ぶりをしたはめや」（下草・恋連歌・681／682）。○払ふ白露：草の葉についた白露を払いこぼすこと。「山辺涼しく払ふ白露／雨そそぐあしたの月に旅立て」（心玉集・秋・1188／1189）。

【付合】 旅行中、朝の出立が早いために仮寝しかできないうちに夜も明け、月も落ちてしまい、旅立ちの準備で騒がしくなる、という前句に、そのようにして早朝出立した旅人は、道すがら草葉に置いた朝露を払いながら歩き続けるのだ、と付けた。

【二句立】 旅人が草葉を分けて歩を進めるので、草葉に置いた白露を払いながら行く、という朝の情景を詠んでいる。

【現代語訳】 人音がするのは、仮寝に見た月も消え、夜が明け、旅人が出立するからである。このような時に出立する旅人は道の行きずりに、草に置いた白露を払い落として行くことだ。

（初折・表・七） 道ゆきぶりに払ふ白露

七 かたはらに小萩しほるる野辺に来て

【校異】「し」：③「し^ニ」 「しほるる」：①「移^{しほる、イ}ふ」 「野辺に来て」：④「野に出て」

【式目】秋（小萩） 小萩（植物） 木に草（可隔三句物） 草与草（可隔五句物）

【語釈】○かたはらに…そばに。○小萩…小さな萩。また、萩の美称。「宮城野のもとあらのこはぎ露を重み風をまつごと君をこそ待て」（古今集・恋四・694・よみ人しらず）。「宮木野のこ萩が枝に露ふれて虫の音むすぶ秋の夕かぜ」（後鳥羽院御集・野辺虫・1483）。○しほる…露などのために、たわむこと。だらりとなること。「小萩原まださかりなる花の色をしほれてみする露のあさあけ」（権大納言俊光集・秋朝・237）。

【付合】草葉の露を払いながら進む朝の旅人の目には、その露の重みでしおれている小萩がいじらしく映るという付けであろうか。【語釈】に引いた古今集歌を踏まえていると思われるが、「かたはらの」の語意が明確でないので宗祇の作意はつかみにくい。

【一句立】「かたはら」は何の傍らなのか明確ではないが、小萩が主役であるから宮城野の草葉の群れと推測される。

【現代語訳】歩を進めるままに、草に置いた白露を払い落として行く、その傍らには、小萩がその露の重みでしおれている、そんな野辺にやって来ていて。

（初折・表・八）かたはらに小萩しほるる野辺に来て

八 虫の声聞く日は暮れにけり

【校異】「聞く」：①「き^{する}く」

【式目】秋（虫の声） 虫（二座一句物） 虫与虫（可隔五句物）

【語釈】○虫の声聞く…「聞くもうしながぎ夜あはぬ虫の声／おもひなそへそ松風の月」（河越千句第二百韻・93／94・興俊／心敬）。「露ながらこばさでをらん月かげにこはぎがえだのまつむしのこゑ」（山家集・月前虫・394）。「小萩原上

には露の玉ちりて下にはむしの声みだるなり」（拾玉集・日吉百首・秋・432）。○日は暮れにけり：日は暮れてしまったことだ。「しら雲のかかるたびねもならはぬに深き山路に日は暮れにけり」（堀河百首・山・永縁・1372）。「かる野を遠み日は暮れにけり／求めじよよしやいづれの旅の宿」（文明五年八月十九日何路百韻・32／33・宗元／宗祇）。

【付合】しおれた小萩に特徴づけられる野辺の草むらで、すだく虫の声に聞き入っているうちに日は暮れてしまったと付けた。素直な付けである。「露」から「小萩」、「小萩」から「虫の音」を詠み出していく連想の根底には、前句や本句の語釈に掲出した新古今時代の歌人たちの歌があるか。

【二句立】虫の声を聞きさびしきに加えて、日も暮れてしまう心細さを表現している。

【現代語訳】傍で小萩がしおれている野辺にやってきて、虫の声を聞いているうちに、日は暮れてしまったことだ。

（初折・裏・一）虫の声聞く日は暮れにけり

九 山かげや風もとまらぬ草の戸に

【校異】「と」：①「と」②「と」③「た」

【式目】雑 戸（居所・体、後『連歌新式追加並新式今案等』では一座四句物）

【語釈】○山陰：山の北側、陰側。日が差しこまず、気温も低く、風も寒く吹き過ぎていく場所。人も訪ねてこない寂しさは、隠者が住むのにふさわしい場所でもある。「山かげの草の戸ざしやくらからし明るもしらぬ虫のこゑこゑ」（統亜槐集・朝虫・214）。「誰をかも松虫のねに忍ぶらん／山かげさびし高砂の月」（萱草・550／551）。「山陰にすまぬ心はいかなれやをしまれて入る月もあるよに」（新古今集・雑中・1633・西行）。○風もとまらぬ：風さえもとどまらない。「わすられてとしふるねやのいたまあらみかぜもとまらぬ冬はきにけり」（林下集・嬪閨冬来といふことを・147）。「ふはの山かぜもとまらぬ関の屋をもるとはなしにさける花かな」（後鳥羽院御集・関路花・1162）。うつろな虚しさを表し、連

歌では心敬の周辺に見られる語句。「風もとまらぬ世中のはて／行船の跡なき波をこの身にて」（心玉集・1448／1449）。「風もとまらぬ山の天びこ／物毎にたゞありなしをかたちにて」（芝草内連歌合・2970／2971）。ただし、校異に見られる「風もたまらぬ」の形であつてもそのまま意味は通じ、例句もある。その場合は、「風もとまらぬ」が風の向こうに広い空間をより意識させるのに対して、風を受けとめるものすらない、より荒れはてた庵のイメージとなろう。「あれはてて風もたまらぬ故郷の夜さむのねやにころもうつなり」（新後撰集・秋下・題しらず・412・九条左大臣女）。「あれたるかべは風もたまらず／冬ごもりいつまで草の戸を閉て」（行助句・1119／1120）。「すゑいそぐ菌に小松を植置て／野中の家は風もたまらず」（河越千句第四百韻・41／42・心敬／修茂）。○草の戸：草葺屋根の粗末な庵の戸。山陰にあるならば、前掲の西行歌のように、隠者の住むべき庵となる。「住まばただ心の奥の山もがな／草の戸荒らす野辺の松風」（寛正六年正月十六日何人百韻・19／20・宗祇／心敬）。

【付合】日が暮れるまで虫の声を聞く人は、山陰の草の庵の侘び人であると付けた。山陰の草の庵は、侘び人にとり、あらまほしい住処であり、付合のような静謐な状況は、むしろよろこばしい。

【二句立】風さえもとまらず吹きすぎてしまうようなはかない草の庵に住んで、と侘び人の状況を詠む。

【現代語訳】虫の声を聞いて一日は暮れてしまったことよ。山の陰にあり、人はもちろんのこと、風までもとどまらず通り過ぎていってしまう、寂しく荒れた草の庵に住んで。

（初折・裏・二） 山かげや風もとまらぬ草の戸に
十 つもらむほど雪に見えたる

【校異】「た」：③「ぬ」^た④「ぬ」

【式目】冬（雪） 雪三用之、此外春雪一 似物の雪別段の事也（一座四句物）

【語釈】○つもらむほど…積もっているのは。風はとどまらないが、雪は積もるといふ対比か。○雪に見えたる…雪が積もっているように見える。「空晴て国をへだつる山の端も雪にみえたる窓の朝明」（草根集・遠山見雪・10039・長祿元年十一月五日詠）。「檜原のくもる後晴れてけり／雪に今朝みえしは花の嵐にて／昨日か立てるあらたまの春」（天正十四年三月十九日何路百韻・48／49／50）。

【付合】山陰で風も吹きすぎてなにも残さない粗末な草庵の戸だが、そこにもし積もるものがあれば桜の花びらで、それはきつと雪に見えたことだろう。

一句の季節は「雪」という語句を使って冬になし、しかし、前句の「風」の吹き行くイメージから、花を散らす風が意識され、雪と花の見立てのイメージが呼び起こされたか。ただ、句中に「花」「桜」といった語句がなく、確定はむずかしい。

【一句立】何もないと思っていたが、積もると雪に見える。

【現代語訳】山の陰にあつて風もとどまらず過ぎていつてしまふ、草の庵の戸にも、とまらず積もっているのは、雪だと見える。

【訳注引用文献典拠一覧】

式目の引用は京大本『連歌初学抄』（京都大学蔵貴重連歌資料集一）（平成一三・臨川書店）（連歌新式、新式今案共に）による。『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合は、木藤才蔵『連歌新式の研究』（平成一一・三弥井書店）所収太宰府天満宮文庫本によつた。

【語釈】等における和歌の引用は、『新編国歌大観』『新編私家集大成』CD-ROM版を使用し、本文は断らない限り『新編国歌大観』CD-ROMによる。『草根集』は日次本（『新編私家集大成』所収書陵部蔵御所本）を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観』所収の類題本（ノートルダム清心女子大本）の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺

本の番号によった。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

連珠合璧集：中世の文学『連歌論集一』（昭和六〇・三弥井書店）

愚句老葉：金子金治郎『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）

老葉注：金子金治郎『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）、『京都大学蔵貴重連歌資料集2』（平成一五・臨川書店）をも参照。

僻案抄：『日本歌学大系別巻五』

万葉詞：『陽明叢書国書篇中世国語資料』（一九七六・思文閣出版）

宗祇抄：『万葉集叢刊 中世編』

吉野雲：島原泰雄『芳野紀行』—影印・翻刻・校異・解説—（『国文学研究資料館紀要』第七号・一九八一・三）。紀行の時期（承応三年）も島原氏論文推定による。

寛正二年九月二十三日何人独吟百韻「岩か根に」：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）所収野坂元定氏本

表佐千句：古典文庫『千句連歌集四』（昭和五七）所収大東急記念文庫本

顕証院会千句：古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収内閣文庫本

袖中抄：歌論歌学集成第四・五巻（平成二二・三弥井書店）

自然齋発句：岩波文庫『宗祇発句集』（昭和二八・岩波書店）所収伝肖柏自筆本、『連歌大観一』所収大阪天満宮文庫蔵A本も参照。

享徳千句：古典文庫『千句連歌集三』（昭和五六）所収小松天満宮蔵本

美濃千句：古典文庫『千句連歌集四』（昭和五七）所収大阪天満宮文庫本

湯山両吟：新潮古典集成『連歌集』所収京大図書館蔵宗祇自注本

吾妻邊云捨：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）

萱草：貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』所収伊地知本、『連歌大観一』も参照。

下草：貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』所収金子本

文明四年十月二十六日何路百韻：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）所収太田武夫氏本

心玉集：貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収静嘉堂文庫本

河越千句：古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収内閣文庫本

文明五年八月十九日何路百韻：江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）所収国会図書館本

天正十四年三月十九日何路百韻：日文研連歌DB所収本

【参考文献】

両角倉一『宗祇連歌の研究』（昭和六〇・勉誠社）

両角倉一『連歌師宗祇の伝記的研究』（平成二九・勉誠出版）

この訳注及び翻刻は、科研費基盤研究C（17K02421）「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の成果である。